

友達以上家族未満のシェアハウス

最寄り駅から歩いて約20分。築40年以上の1軒家の玄関を入ると、吹き抜けるの広々としたリビングが現れる。壁や柱には明るい色目の木材が多く用いられ、温かい雰囲気だ。ソファの横には煙突付きの暖炉もあり、だんらんの時間を大事にしていたであろうことがうかがえる。

東京都杉並区の「今川のシェアハウス」。長年ここで暮らしていた家族が家を離れることになり、2018年に単身者5人の住むシェアハウスに生まれ変わった。

国内でシェアハウスは増え続けている。日本シェアハウス連盟(東京・渋谷)によると、全国に約5000棟あるという。もともと外国人の中期滞在向けに始まったが、「2000年くらいから日本人の居住者が増え始めた」(近藤誠二代表理事)。当初、主人の理由は家賃を抑えられる点だったが、そん

な様相は変わりつつある。

今川のシェアハウスもそう。決して便利な立地ではないし、家賃も安くはない。それにもかかわらず、ここに住みたいという人が集まっていく。

理由のひとつが家だ。

「シェアハウスに住みたかったというわけではないんです。住人のひとり、建築関係で働く深澤隼さん(34)は話す。「丁寧に作り込まれたこの家に住んでみたいと思った」

この1軒家はフランク・ロイド・ライトのもとで学んだ遠藤繁が設計した。約40年住んでいた一家の夫が亡くな

り、「大きな家に1人でいるのは大変だから」と妻が手放そうとしていた。そんなとき、商業施設から戸建てまで、幅広く手がける勝亦丸山建築計画(静岡県富士市)の勝亦優祐さん(32)と丸山裕貴さん(32)と出会い、「この家を残すために役に立たないか」という若い人の情

熱を感じて、応援したくなった」という。「家とともに思い出に残るよ」との娘の声にも背中を押され、2人にシェアハウスへの改築を依頼した。

「建物が持っている寸法のリズムからなるべく外れないよう意識した」と建築家の丸山さん。面積を考えれば、通常のシェアハウスならもう2部屋は作れるそうだが、ゆったりとした空間はそのままに、家族から個人に変わる住まい手に合わせ、個室間の壁を共有しないようにしたり、共有スペースにも小さな居場所を点在させたりした。

「ひとつの建物と向き合って生活するようにになった」。住人の杉浦菜花さん(28)は話す。ここに住む前は「家は帰って寝るだけの場所だった。今は、春は気持ちのよい風を感じたり、夏になると部屋の壁にシミを発見したり、家を感じながら生活している」。自分よりも長く生きてきた家の歴史を、住みながら

体全体で感じているという。

「極端に言う」と前置きしつつ、深澤さんは「空間の広さやしつらえのよさは、性格にまでも影響していると感じる」と話す。ワンルームに住んでいた際には「いろいろなことが面倒になったが、ここだと自然と気が引き締まり、だらだらすることが少なくなった」。そう、もちろん、それに疲れてしま

うときもあるんですけど

建築やものづくりに携わる人が多く住むこの家は、不動産業者を通さずホームページから直接申し込む。企画や設計だけでなく、珍しいことに運営も建築家の2人が担っているのだ。「見た目の良さや使い勝手も大事だが、担い手とともに、その場所がきちんと機能することが最も重要」と勝亦さん。家に2人が顔を出すことも多い。

この家に人が集まるもうひとつの理由は、そんな2人を介して生まれる人

間関係の心地よさだ。住人の遊佐淳平さん(29)は「駅近の便利な立地でもないここに住む、感性の似た人が集まっている。夜や週末など、気づけば集まり、長々としゃべっていることがある」という。デンマーク留学後住み始めた増田早希子さん(34)も暮らしを大切にしたいという価値観が似ているから仲

はいいけれど、べたべたするわけでもなく一緒にいて居心地がいい。無理なく素の自分のままでいられるという。住まいは、そのときの社会のありようを映し出す。江戸時代の長屋は、商人や職人といった庶民の暮らしを、戦後、都市で働く中堅勤労者向けに供給された公団住宅は、夫婦と子どもの標準世帯の生活を思い起こさせる。長い景気低迷を経て、少子高齢化が進み、单身世帯も増えた。シェアハウスが映し出すのは、「どうしたら日常を豊かにできるのか、改めて考えようとしている今の状況では」。勝亦さんはこう話す。

お邪魔した日、リビングには増田さんが飾った花が揺れ、遊佐さんがコーヒールをいれて、皆にアイスカフェラテを作ってくれた。杉浦さんが出かける時間になると、「いってらっしゃい」と皆が声をそろえ、手を振っていた。当たり前の日常なのだろうが、特別に見えた。皆さんはどんな関係なんですか? 「友だちよりは家族に近いんですけど、家族じゃない。不思議ですね」 「それぞれの人生があって、今という時間を共有している関係かな」 「お互いのいい部分もいやな部分も見えている。でも尊重しあっている。メンバーですね」。こう話したのは遊佐さんだ。この家を守り、次の住人へ伝えていく、そんな仲間なのかもしれない。



「今川のシェアハウス」のリビングとダイニング。広々としたぜいたくなスペースで、おののくつろいだり、ときには夜通しおしゃべりしたり。ゆったりとした時間が流れていた



5人で共有するキッチン。皆で料理することもあるそう。果実酒や味噌を作っている人も



建築関係の仕事をする遊佐さんの部屋は和室。「この家は人とのつながりをもたらす場所」と言う



改築の際に設けた黒板には、最近誕生日だった杉浦さんへのお祝いメッセージが書かれていた